

令和4年度 第4回四国森林管理局国有林材供給調整検討委員会【議事概要】

1 日時及び場所

令和5年3月15日（水）10時00分～11時30分

四国森林管理局 3階会議室（ウェブ開催）

2 議事概要

【委員会の検討結果】

製材品については、相場は軟調に推移しており、スギ材は輸入材との競合等から今後厳しさが感じられるが、ヒノキ材はスギ材に比べ安定している。そのような中、丸太の出材は、積雪の影響もなくなり堅調、原木市場でも荷動きは良好。特にスギ・ヒノキ4メートル物は引き合いがよい。

このため、国有林材の供給調整を行う必要はなく、民有林材の出材状況や外材製品の状況等に注視しつつ、引き続き需給動向を見極めていくべきである。

【主な意見等】

○ 素材生産業

- ・ 2月上旬に行った木材生産にかかる状況調査では約6割の事業者が間伐事業が主体となったと回答している。このため、生産量の高い皆伐が伸びず昨年度並みの生産量に留まっていると推測している。
- ・ スギについては、全体に価格の変動は見られない。ヒノキについては、最近注文が増えており、末口15cm～22cmはやや強含みで推移している。パルプもトン当たり500円引き上げられた。生産体制は例年並みに戻ってきた。
- ・ 気象などの影響による作業の中断は比較的少なかったものの、作業条件が下がったことやマンパワー不足等から生産性が低下したところも見られる。又、燃料資源、使用資材等の高騰が経営を圧迫し、負のスパイラルに陥っている感がある。

○ 原木市場・共販所

- ・ 入荷量については横ばい傾向。地域にもよるが、桧材は昨年度よりも単価が良いためか出材の割合で見ても多いと感じる。杉については、相変わらず4m材15cm～22cmは不足気味だが、製品の動向が悪そうな話を聞くので今後は値下がりするのではないか。
- ・ 積雪等のため入荷量の減少は発生したが、それ以外では大きな変化はない。荷動き

自体も悪いといいつつも動いている状態だ。ただ地元工務店からは、住宅展示会の応募の減少などの話も聞くので良い見通しはできないが、外材から国産材へ変更の動きもあるので、しばらくは現状の状態が続くのではないかと感じる。

- ・ 直近の入荷量は、前年比スギ97%、ヒノキ91%。荷動きはスギ、ヒノキともに良好、一時的な増減はあっても現状の素材生産は継続されるのではないかと感じる。価格については、スギは概ね横ばい、ヒノキは3m柱口、4m土台等構造用材が強含んでいるが、3月に入って製材品の荷動き低迷から、軟化するのではないかと感じる。エネルギー高、物価高騰により新設住宅着工数、特に持ち家の減少で先行きはなお不透明と感じる。

○ 製材工場等

- ・ スギ、ヒノキとも小径木が不足気味で値上がり傾向にあるが、全般的に製品の荷動きが悪いため原木調達を控えている。

製品価格は、ウッドショック前の価格よりは若干高値で推移しているが、ベイマツの値下がりや欧州材の値下がりにより、国産材の価格も徐々に下がるのではないかと感じる。

- ・ 製品市場では特にヒノキの荷動きが悪い。柱・土台の市場価格は引き続き下落傾向、小割は不足気味で堅調。地元工務店は価格の変動に対応できず、県内住宅市場は県外資本に回った感があり、下落は止まらないのではないかと感じる。
- ・ 合板の荷動きは22年秋以降かなり鈍化しており、在庫は依然として高水準に推移している。また、国産針葉樹構造用を中心とした荷動きの鈍化は、住宅等の実需の低迷を反映したもので、合板メーカーは減産を強化しているが、相場は軟調である。
- ・ ヒノキ材については、年末頃から積雪の影響もあり少し入荷が減少、スギ製品に比べヒノキ製品の動きが良いこともあり、相場は強くなっている。

プレカット工場の稼働率は良くないが、秋頃に高い単価で契約された輸入材に比べ、今はヒノキ材の価格に競争力があるため、ヒノキ製品の売れ行きは良い。ただ輸入材やスギ集成材の価格が下がってきているので、どこかで調整局面が訪れるのではないかと感じる。

- ・ 原木については、調達は難しくないが、価格は製品の動きの悪さに比べ下がっていない。製品出荷については、2～3月は本決算を迎える企業が多く動きは非常に悪い。また、外材製品の先安感もあり見通しも悪い。